



ウォリアーズ日本一の夢

第二種金融商品取引業協会
専務理事

神崎 康史

現職に就いてから半年になる。当協会は、信託受益権やファンド持分などのいわゆる「みなし有価証券」を取扱う第二種金融商品取引業の自主規制団体であり、約660社の会員が加入している。私自身は、直前は上場株式等、電子化された有価証券の振替決済を行う組織にいたため、見える世界も全く違って、この業界の多様性を実感する半年であったように思う。

この間、趣味のゴルフは酷暑と台風にたたられ散々だったが、9月以降の週末は、東大アメリカンフットボール部（チーム名はウォリアーズ）の活躍をOBとして応援することが楽しみであった。

今から45年余り前、大学に入学後、高校まで続けた柔道とは全く違うスポーツをしたいと思って入部したのがアメフト部である。といってもどのような競技かはほとんど知らず、ヘルメットとプロテクターを着けたユニホーム姿が格好よく見えたというのが決め手となった。

しかし、入部してみると華やかなイメージとは大違い、授業に出る暇もなく週5日間の練習、自分はラインという最前線のポジションだったが、ボールに触ることもなく、ひたすら相手の選手にぶつかって、ブロックしたり、タックルしたりの毎日であった。試合も土のグラウンドで、雨になると水たまりの中、泥まみれの戦いとなった。ちなみに通常は攻撃・守備で選手が交代するのだが、当時は部員数が少なく、攻守兼務の出ずっぱりだった。

その頃に比べると、アメフトもウォリアーズも大きく変わった。

チームの練習も、大学リーグの試合も、人工芝のグラウンドが整備されている。ルール自体も安全重視の考え方が徹底し、昔は頭から突っ込んでボールめがけてタックルしろと言われて



いたが、今はそのようなことをしたら反則である。

ウォリアーズも部員数が増え、選手だけでも100人を超え、サポートスタッフを加えると200人近い大所帯となった。その活動を支えるためにOBOG会やファミリークラブを基盤として、支援法人が設立されている。

今シーズンは、選手の頑張りもあり、強豪校の集まる関東大学1部TOP8のリーグ戦で4勝3敗の好成績を収め、全日本大学選手権トーナメントへの進出は惜しくも逃したものの、8校中同率3位の活躍であった。

入部時には大半が初心者であるウォリアーズにとって、経験者の多い上位校は大きな壁ではあるが、いつの日か、甲子園ボウルに出場して、大学日本一となることをファンの一人として心待ちにしている。